

蘭學事始

上

特 別

リ 5

4747

1



門五級 5
號 1804
卷 1-2


明治二年己巳新刻

蘭學事始

天真樓藏版

鸕齋杉田朱生肖像



大浪實


蘭學事始

序

一

天真樓藏

先生名ハ翼字ハ子鳳俗稱ハ玄白一ニ九幸ト號ス父
ハ甫仙ト云若州侯ノ醫貞ニシテ母ハ蓬田玄孝ノ女
ナリ先生誕レシ時其母難産ニテ分娩ノ後終ニ絶命
ニ及リ傍人皆産婦ノ暈倒ヲ救ハムトテ初生兒ノ事
ニ及ハズ且難産ニテ分娩セル兒ナレハ定メテ死セ
ル者ナラントテ布片ニ包ミ之ヲ蓐側ニ置ケリ然シ
テ後之ヲ顧ルニ全命ナリ且男兒ナリケレバ人々再
ヒ愁眉ヲ開キ乳哺養育シテ漸ク成長ニ至レリ甫メ
十七八歳ノ時牛山若州郎内父ノ膝下ニ在リテ之ニ
告テ曰ク不肖男此齡ニ至ルマテ疎慢ニ日ヲ消セリ

願クハ今ヨリ新ニ良師ヲ求メ本業ヲ習學セント大
人欣然トシテ曰ク余汝カ其言ノ出ツルヲ待テリト
此ニ於テ當時二本榎ニ住セル官醫西玄哲ト云ヘル
人外科ニ名アリケレハ乃チ其門ニ入り從學シ日々
怠慢ナク風雨ヲ厭ハズシテ遠路ヲ往来セリ又本郷
ニ俗稱宮瀬三郎右衛門ト云テ龍門先生ト號セル儒
人アリ乃チ其人ニ從ヒテ經史ヲ學ヒ之ヲ研精セリ
二十五歳ニシテ侯ヨリ部屋住料五人口ヲ賜リケレ
ハ此時大人ニ乞フテ外宅セリ且月俸五人口ヲ以テ
父ノ給ヲ待ツヘカラスト約シ遂ニ願文ヲ呈シ許允

ヲ得テ日本橋通四丁目ニ偶居セリ画工楠本雲溪ノ
鄰家ナリシト云爾後箔屋町堀留町等ニ轉居セリ是
レ火災ニ遭ヒシカ故ナリト云三十七歳ノ時父甫仙
君没シ給ヒケレバ此時ヨリ新大橋ノ中邸ニ住居シ
テ蘭學創始ノ舉アリ四十四歳ニテ再濱町竹本藤兵
衛ト云士人ノ地ヲ借り之ニ外宅セリ是ヨリ家學ヲ
全備セシメントシ奕世傳來ノ和蘭瘍科ト唱フル書
ヲ檢點スルニ何モ彼邦人ヨリ譯官ヲ以テ聞出セル
者ノミニシテ取ルニ足ズ又漢土ノ外科書ヲ遍ク涉
獵スルニ疎漏ニシテ何レニ適從センコトヲ知ラス

是ニ因テ新ニ日本一派ノ外科ヲ創建セント思惟シ
漢土ノ書籍中外科ニ係ル確言要語ヲ逐一撰集セン
トヲ同藩ノ一奇士青野小左衛門ト云人ニ語リケレ
バ士其本業ニ切ナルヲ感賞シテ其撰書今如何程成
レリヤト問フ否未タ其草ヲ起サス唯志ヲ發セシ迄
ナリト云ヒシニ士大ニ之ヲ勵マシテ曰ク足下既ニ
斯ル大業ヲ起サントシ何ヲ以テ猶豫シ給フヤ是レ
明日ヲ期スベキトニアラス宜シク今日ヨリ筆ヲ把
リ給ヘト其言ニ深ク服シテ即夜ヨリ業ヲ始メ瘍科
大成ト題セル書數卷ヲ撰集セリ其後和蘭原書内景

蘭學事始序
圖ヲ見テ臟腑筋脉ノ漢說ト大ニ異ナルヲ疑ヒ刑屍
ヲ解剖シテ之ヲ其圖ニ徵スルニ其脗合符節ヲ合ハ
スカ如キニ驚キ之ニ心服シ遂ニ憤然トシテ洋書翻
譯ノ業ニ從事シ此學ヲ首唱シ給ヒケレハ其名海外
ニ轟キ治ヲ請フ者門前ニ市ヲナシ晩年ニ及ンテ
台府ニ拜謁ヲ許サレ八十五歳ニシテ館ヲ捐テ給フ
右ハ盤水大槻先生ノ筆紀シ置レシヲ其マ、寫出
シテ以テ序文ニ代フ

明治二己巳年正月望 不肖曾孫杉田擴玄端謹識

蘭學事始序

是書ハ吾四世ノ祖鷓齋先生ノ遺編ナリ粵
ニ先生ノ時ヲ稽ルニ世ノ士君子耳目ノ及
ブ所未タ速カラズ縱ヒ博雅ノ人ト雖モ口
ヲ開キ譚スル所ハ惟唐竺ノミニシテ曾テ
泰西ニ渉ル者ナシ偶々一二之ニ渉ル者ア
ルトモ僅ニ常言瑣語ニ通シテ止ミ奧旨ヲ
發シ以テ實用ニ施スヲ聞カス先生英邁ノ
資ヲ以テ超然流俗ヲ拔キ二三子ト謀リ首

トシテ泰西ノ學ヲ唱一啗嘯ノ書ヲ緡キ專
志研究實ニ畢生ノ全力ヲ盡セリ遂ニ前哲
未曉ノ學ヲ啓シ千古未洩ノ竒ヲ闢シ二三
子ト共ニ此學ノ鼻祖トハ為リニキ爾來諸
名哲其緒ヲ繼キ學規漸ク拓ケ次テ迄今泰
西諸國本邦ト通好セシヨリ諸般ノ學科一
時ニ勃興シ諸國ノ載籍所在アラサルハ無
ク殆ト戸學人習ノ盛ニ至レリ嗚呼今ノ學
ヲ為シ易キ此ノ如クナルモ溯リテ先生ノ

古ヲ見レハ彼ノコトク難キナリ抑天下ノ
事皆ナ最勤苦ヲ歷ルノ後ニシテ始テ簡易
ヲ得レハ今ノ學ヲ為シ易キ此ノ如キモ畢
竟先生輩ノ賜ニアラスト云フヲ得ズ是書
ハ只先生ノ漫筆ナレ氏古人苦心ノ一斑ヲ
窺フベケレハ或ハ懦夫ノ志ヲ立テント思
ヒ且祖先ノ功勞ヲ没セザルハ子孫ノ務メ
ナリト思フテ茲ニ刊行シヌ

明治二己巳年孟春

四世孫杉田鶴廉卿謹撰

蘭學事始上之卷



今時世間は蘭學といふ事専ら行はれ志を立つる人ハ萬く学ひ無識なる者ハ湧りよこれを誇張す其初を顧ミ思ふは昔ハ翁ウ輩二三人不圖此業ヲ志を興セシ事なるヲたや五十年ハ近シ今頃ウク迄ハ至るヘシトハ露思ハざリトハ不思議ヲも盛人トナリシ事なり漢学ハ遣唐使といふものを異朝へ遣はされ或ハ英邁の僧侶などを渡され直ニ

大正七年七月廿二日
杉八郎 大贈

彼國人は従ひ学ハせ帰朝の後貴賤上下へ教導の
 為めなる給ひ事なれハ漸く盛んなりハ尤
 の事なり此蘭学ハ左様の事ハも非ず然るもハ尤
 成り行ハいハ思ふハ夫醫家の事ハ其教へ
 方搥て実ハ就くを以て先とする事ハ却て領會
 すること速クなるハ又ハ事の新竒ハ異方妙
 術も有ることの様ハ世人も覺居る故奸猾の徒こ
 れを名として名を釣り利を射る為ハ流布するも
 のなるハつらく古今の形勢を考ふるハ天正慶長の
 頃西洋の人漸々我西鄙ハ船を渡せハ陽ハ交

易陰ハ欲する所有てなるハ故ハ其災起り
 を國初以来甚と嚴禁ハ給へり見へりこれ
 世ハ知る起なり其邪教の事ハ知らざる所の他事
 なれハ論ハ但ハ其頃の船ハ來來リハ醫者の傳
 來を受とる外科の流法ハ世ハ残るも有りこれ世
 ハ南蠻流ハ云ふなり其前後より阿蘭陀船ハ御
 免有て肥前平戸へ船を寄せぬ異船御禁止ハなり
 ハ頃も此國ハ其堂類ハ非ず次芽ありて引續き
 渡來を許され給へり夫より三十三ヶ年目にて長
 崎出島の南蠻人を逐ひ拂されて其跡へ居を移せ

一より夫より八年長崎の津に船を来す事とハ
 成りぬこれハ寛永十八年の事なるより其後其船
 一随従し來る醫師も亦彼の外治の療法を傳へ
 者も多しとなり是を阿蘭陀流外科とハ稱する者
 一是れ固より横文字の書籍を讀て習ひ覺し事
 一も非ず只其手術を見習ひ其菜法を聞書留する迄
 一有り尤もこなとよなき所の菜品多けれハ代菜
 一ちよてそ病者を取扱ひし事と知らる

一其頃西流と云ふ外科の一家出来たり此家ハ其初
 一南蛮船の通詞西吉兵衛と云る者よて彼國の醫術

一を傳へ人し施せし其船の入津禁止せられて後
 一又阿蘭陀通詞となり其國の醫術も傳り此南蛮阿
 一蘭陀西流を相兼しとて其西流と唱へしを世ハ
 一西流と呼しし其頃ハ至て珍しき事よて有けれ
 一ハ専ら行とれ其名も高かりし也ハ後ハ官
 一醫よ召し出され改名して玄甫先生と申せし
 一其男宗春と申されしハ多病よて早世し給ひ家絶
 一へしとなり是れ我祖甫仙翁の師家なり其後召出
 一されし今の玄哲君の祖父玄哲先生ハ玄甫先生の
 一姪の續なりとなり右の玄甫先生初て西洋醫流を

唱へられしより公儀も御用ひ遊されし事
 て阿蘭陀醫事御用子立し始なり
 一又粟崎流といへるハ南蠻人の種子なりと云れハ
 南蠻邪宗の徒嚴禁となり其船の渡海も御禁制と
 なりとれども以前ハ平戸長崎の地は彼人々雜居
 し妻を持ち子も有りしが後々去れども吟味有て
 蠻人の種子の分ハ残らず此地を放流せられしハ
 其中粟崎氏にて名ハ「ドウ」と云ふものハ彼地は成
 長くても其宗は入らず其國の醫事を學ひしが
 邪宗は入らざる訳を以て帰朝を許され召歸され

長崎へ帰りし後其術を以て大に行れ至て上手な
 りし人々粟崎流と稱せしは名ハ「ドウ」と云ふ
 ハ蠻語露の事なるよし後ハ文字を填めて道有と
 認しとそ今の官醫粟崎君の祖なるや又別家の粟
 崎なるは詳なる事ハ知らざるなり吉田流楠林流
 名と云ふハ阿蘭陀通詞にて彼方法を學ひ一門戸
 を開きしなり

一桂川家の事ハ今の代より五世の祖甫筑先生と申
 しハ文廟未と藩邸におとせし時召出されし御
 外科なり其師家ハ平戸炭の醫師にて嵐山甫安と

申とるよりなり此甫安へ其族より出島在館の阿
 蘭外科の御託に置いて親しく學ハせ給ひしに
 り此御家へ平戸へ入津以来彼國の事ハ訣品有て
 御親しに御自由なる事のよし又其時代ハ今の如
 くよもなかりしよや甫筑君其頃幼若よて門人
 たり師に附添て出島へ時々参られし専ら嵐山
 の流法を傳へ給ひしになり阿蘭陀の外科ハ
 子ルニ「アルマンズ」といふ人にきけり桂川も
 大和の國の人よて森島氏なりし嵐山の流を汲
 むといふ意よて家苗を桂川に改め給ふに
 なり今

の桂川君の御祖父甫三に申せしハ翁若かりし時
 常に交厚かりし御人なりし故此事語り給へるを
 聞置き侍りぬこれを世に桂川流と稱しぬる事な
 り

又古来「カスバル」流といふ外科有りこれハ寛
 永二十年南部山田浦へ漂流ありし阿蘭船の
 人数の内江戸へ召呼れし中「カスバル」某と
 いふ外科あり三四年留置れ其療法を學せら
 れし者もありしが追々長崎へ御送りしよ
 江戸並に長崎より正保の頃此「カスバル」

り傳來の療方ありしを詳なる事を知すと
 後よカスバル流と唱ふる事と申す事よ又
 別よカスバル姓の外科渡來の事もありし
 此他長崎よて吉雄流ると云へるハ其後渡來
 の蘭人より傳へ得たる療方も有て吉雄流と
 も申せり其諸家の傳書といふ者共を見るよ
 皆膏藥油藥の法のよて委しき事をし斯の
 如き類よて備らざる事のよなれとも其業ハ
 漢土の外科よハ大よ勝り又本邦の古へより
 傳りたる外治よハ大よ勝れりといふべき歟

其中よ翁々見たる樞林家の金瘡の書と云ふ
 ものあり其中よ人身中よ「エイメン」といへる
 ものありこれハ生命よあつたる大切のもの
 なりと記せり今を以て見れハ是れ「エイニユ」
 として神經と義譯せしものと思はる由つら
 るらこれ程の事を聞書せしハ此書を始と
 すべし

一國初より前後西洋の事不付てハ右うぐの事有て
 搦て嚴し御制禁仰出されし事由へ渡海御免の
 阿蘭陀ふても其通用の横行の文字讀み書の事ハ

御禁止なるふより通詞の輩も只々と假名の書留
 等まで小て口づうら記憶して通辨の御用も辨せ
 一よて年月を經とり左ありし事なれハ誰一人横
 行の文字讀習ひ度といふ人もなかりしなりき然
 るハ萬事其時至れハ自ら開け整ふものなる也へ
 不也

有徳廟の御時長崎の阿蘭通詞西善三郎吉雄幸左
 衛門令一人何某名ハ忘れとらいふ人と申合て談せ
 一ハ是よて通詞の家小て一切の御用向取扱は彼
 文字といふものを知らず只暗記の詞のミを以て

通辨一入組する数多の御用を渴く不辨して勤居
 ることハあまり不手薄き様なり何卒我々斗りも
 横文字を習ひ彼國書をもしむへき事御免許を蒙
 りなさいと小左あらバ以來ハ萬事不付け事情明
 白不令り御用辨しるしるへきなり是迄の姿不
 てハ彼國人に偽り欺るゝ事ありてもこれを糾明
 するの便りもなき事なりと三人いひ合て此次第
 を申立何卒御免許を下さされ度昔公へ願ひ奉り
 一御聞届れ至極尤の願筋なりとて速に御免を
 蒙りしとなりこれぞ阿蘭陀渡来ありて後百年餘

小一て横文字學ふ事の始るるよりなり
 一去れふよりて文字を習ひ覺る事出来西善三郎等
 先つ「コンストウールド」といふ辞の書を和蘭人より
 借り得しを三通りして寫せしし和蘭人去れ
 を見て其精力小感し其書を直し西氏小典へしし
 一斯ありし事等自然達 上聞ける見へ和蘭書
 と申もの是にて御覽遊されし事なき者なり何る
 りども一本差し出し候様 上意ありしより何
 の書なりししや図入の本指出せしし御覽遊され
 去れハ図たかりも至て精密のものなり此内の所

説を讀得るるハ亦必ず委しき要用の事あるへ
 一江戸にも誰そ學ひ覺へるハ然るへしこの事
 不て初て御醫師野呂玄丈老御儒者青木文藏殿と
 の兩人へ蒙 仰候よりなり去れより此兩人去の
 學を心うけられし然れども毎春一度つゝ拜礼
 小來る阿蘭陀人小付添ひ來る通詞ともより僅の
 滞留中聞給ふ事殊に繁雜寸暇もなき間の事なれ
 ば一ミく學ひ給ふへき様もなし数年を重ね給ひ
 一事なれども漸く「アン」日「マイン」月「ステル」星「
 一メル」天「アールド」地「ンス」人「マラーカ」龍「テ井」

ル虎^レアロイム^ハボーム^ハ梅^ハバムブリス^ハ竹^ハと云ふ位の
名より彼二十五字を書習ひ給へる事のみなり然
れども是を江戸小て阿蘭陀事學ひ初めし濫觴な
りき

一叔翁の友豊前中津彦の医官前野良澤といへるも
のあり此人幼少して孤となり其伯父淀彦の醫師
宮田全澤といふ人小養れて成り立ちし男なり此
全澤博學の人なりし天性奇人にして萬事其好む
所常人より異なるしより其良澤を教育せし所も
又非常なりしとなり其教ふ人といふ者ハ世に廢

れんと思ふ藝能ハ學置て未にも絶へざる様
ふく當時人のすてててせぬ事よりしをハ去
れを為して世の為は後ハ其事の残る様はすへし
と教へられし如何様其教ふ道ハす此良澤とい
いへる男も天然の奇士にてありしなり専ら医業
を勤む東洞の深信して其業を勤め遊藝も世
はすとりし一節^{ひびき}截^{せき}を替古くて其秘曲を極め又を
らしきハ猿若狂言の會ありし聞て去れも替古よ
通ひし事もありし如此奇を好む性なりしより
り青木君の門に入りて和蘭の横文字に其一二の國

語をも習ひしなり 後、著せる蘭記筌といふもの
 ミ元く同藩の坂江鳴といふ隠士一日蘭書の残
 篇を良澤へ見せ去れハ読まけ解すへきものや
 さいひくは是借り受てつく思ふ國異言殊
 るるさいへども同く人のなす所小くてなすへ
 ららざる所のものにあらんや志きせくは扱去
 れは取付へきの便なきを憾居たりこなる
 夫より不図青木先生此学を道給ふと聞き遂は
 其門に入りて先生を学ひ和蘭文字略考採といふ
 著書を授り先生の学ひ識是ハ其頃青木先生長
 れる所をバ聞書せりなる 是ハ其頃青木先生長
 崎より帰府の後の事と聞か先生長崎へ行かれ
 ハ延享の頃よき思ハる良澤の入門ハ宝曆の末
 明和の初半歳四十餘の時なりくは去れ医師にて
 常人の學へる始なるべく

一 然れども其頃ハ常人の湯り横文字を取扱ふ事
 ハ遠慮せし事なりすて其頃本草家と呼ばれ後
 藤梨春といへる男和蘭事の見聞せしを書集め紅
 毛談といふ假名書の小冊を著し開板せし其内
 には彼二十五文字を彫り入しを何方よりか咎を受
 け絶板となりとる去ともありしとそ
 一 又其のち山形彦の醫師安富寄碩といふ者糊町に
 住たり此男長崎小遊學し彼地にて二十五文字を
 習ひ且つ其文字よていろは四十七文字を綴り合
 せて認め貫ひ帰り人々誇りて彼書籍も讀み合つた

うふいひ觸らせしを翁杯も珍しき事と思ひたり
 同藩中川淳菴杯ハ鞠町ニ町宅にてありし此男
 より阿蘭陀文字を初て習ひしなり
 一翁兼て良澤ハ和蘭の事志ありや否ハ知らず久
 しき事にて年月ハ忘れとり明和の初年の事なり
 しく或る年の春恒例の如く拜礼しして蘭人江戸
 へ來りし時良澤翁ハ宅へ訪ひ來れり去れし何
 方へ行給ふと問ひし今日ハ蘭人の客屋ニ參り
 道詞ニ逢ふて和蘭の事を聞き模様より蘭語杯
 も問ひ尋ねんとめなりといへり翁其頃いよと

年若く客氣甚しく何事もうつり易き頃なれハ願
 くハ我も同道し給れ共ニ尋試しとて申けれハ
 いと易き事なりとて同道して彼客屋ニ行きたり
 其年大通詞ハ西善三郎ニ申す者参りたり良澤引
 合よてしうくのよく申述するよ善三郎聞てそれ
 ハ必ず御無用なり夫ハ何故となれハ彼辞を習ひ
 て理會するといふハ難き事なりとてハ湯水又
 酒を呑といふと問ふとすは最初ハ手真似
 て問ふより外の仕うとハなし酒をのむといふ事
 を問ふとする小先つ茶碗までも持添へ注ぐ真似

をくて口よつけて是ハと問へハうなづきて「デリ
ンキ」ニ教也是れ即ちのむ事なり扱上戸ニ下戸ニ
を問ふハ手真似ふて問ふべき仕々ハ存クニ
れハ数々吞むニ少く吞よて差別ニ々々存りされ
とも多く吞ても酒を好よさる人あり又少くのミ
ても好人あり是ハ情の上の事なれハ存すべき様
なり扱其好き嗜むといふ事ハ「アインテレッケン」ニ
いふなり我身通詞の家ニ生れ如より其事ニ馴居
る々ら其辞の意何の訣といふ事を知らず年五十
よ及んで此度の道中にて其意を始て解得たり「ア

「イン」ニハ元向ふといふ「テレッケン」ニハ引事なり其
向ひ引といふハ向ふのものを手前へ引寄るなり
酒好む上戸といふも向ふの物を手前へ引度思ふ
なり即ち好むの意なり又故郷を思ふも斯くいふ
是又故郷を手元へ引よせ度と思ふ意あれハなり
彼言語をさらし習ひ得んとするハ箇様ニ面倒
なるものこく我輩常ニ阿蘭陀人ニ朝夕してす
ら容易ニ調得し難し中ニ江戸存ニ小居れて學ん
と思ひ給ふハ不叶事なり夫故野呂青木両君など
御用小て年々此客館へ相越され一々さならす御

出精なれどもさうく御合点参らぬなり其元
 小も御無用の方然るべし異見くとり良澤ハ如
 何兼りハ翁ハ性急の生れハ其説を尤聞き
 その如く面倒なる事をなく遂る氣根ハなく徒
 日月を費すハ無益なる事と思ひ敢て學ぶ心ハな
 くして歸りぬ

一其頃より世人何もなく彼國持渡りのものを奇珍
 とし総て其舶來の珍器の類を好み少く好事と
 きニ元一人ハ多くも少くも取聚て常ニ愛せざる
 ハなく殊ニ故の相良辰當路執政の頃より世の中

甚ど華美繁花の最中なりハより彼舶より
 ールガラス「天驗器「テルメモート「寒暖「ドンドルガ
 ラス「震雷「ホクトメ「水液「清濁「驗器「ドンクルカ
 ムル「暗室「写ト「フルランタ「レン「現妖「ソンガラ
 ス「觀日「ルー「グル「筒呼遠「いへる類「種々の器物を
 年々持越其餘諸種の時計千里鏡ならひ硝子細
 工物の類あげて教へりたりハより人々其奇
 巧ハ甚と心を動し其窮理の微妙なるニ感服し自
 然と毎春拜礼の蘭人在府中ハ其客屋ニ夥く聚る
 やうなるりたり何れの年といふとハ忘れし

明和四五年の間なるへーとせ甲必丹ハ「ヤン・カ
 ランス」外科ハ「バブル」といふもの來りし事あり此
 「カランス」ハ博學の人「バブル」ハ外科巧者のよしを
 り大通詞吉雄幸左衛門ハ専ら此「バブル」を師とし
 たりと幸左衛門後幸作舞ハ耕牛と云り外科ハ巧ニなりとて
 其名高く西國中國筋の人長崎へ下り其門に入る
 者至て多し此年も蘭人又附添來れり翁夫等の事
 を傳へ関し由へ直し幸左衛門ガ門に入り其術を
 學へり去れよふりて日く彼客屋へ通ひたり一日
 右の「バブル」川原元伯といへる醫生の舌疽を診ひ

て療治し且刺絡の術を施せしを見たり扱く手よ
 入りとるものなりき血の飛び出す程を預め考へ
 去れを受るの器を余程より引たる置とるよ飛透
 の血てうど其内より入りたりき是れ江戸にて刺絡
 せし始なり其頃翁年若く元氣ハ強し滞留中ハ
 怠慢なく客館へ往來せし幸左衛門一珍書を出
 し示せりこれハ去年初て持渡りし「ペーシステル」人名
 の「ジュルゼイン」外科といふ書なりと我深く懇望し
 て境樽貳拾挺を以て交易しとりと語れり去れを
 披き見ると其書説ハ一字一行も読む事能ハざれ

とも其諸図を見るは和漢の書に其趣大に異し
 して図の精妙なるを見ても心地開くへき趣もあ
 りよりて暫く其書をかり受けせめて図をりりも
 摸し置へきと晝夜写しりり彼在留中の其業を
 卒へとりこれよりて或ハ夜を去めて鶏鳴に及
 ひとりし事もありき

一又年ハ忘れとり一春の幸左衛門阿蘭陀附添
 て参府せし頃豊前中津邸にて昌庶公の御母君御
 座内にて不慮に御脛を折傷し給ひし事あり貴人
 の事をれハ大騒ぎよて彼是醫師を御招きの起幸

ひし吉雄幸左衛門出府居合候事ゆへ直に御招き
 ありて御療治被仰付御順快ありたり此時前野良
 澤御手醫師の事ゆへ懸合仰付られ格別懇意とな
 りとり去れ等蘭学の世小開くへきといふへ
 其後其主の供よて中津へ行くと候へ願ひ奉り
 て彼地へ下り専ら吉雄植林等に従ひて百日斗り
 も逗留し晝夜精一に蘭語を習ひ先は青木先生に
 り學ひし類語と題せる書の諸言を本として復習
 訂正しなされし是し補ひて僅に七百餘言を習
 ひ得彼國の字彙文章等の事等も荒増し閱書して

持帰りし事ありたり此時ハハ蘭書も求めて帰
府せり是れ長崎へ外治警古の為めならで彼書説
學さんて参りし又の始めなり

一和蘭ハ醫術並ひは諸々の技藝も精しき事と世
も漸く知り人氣何もなく化せられ來れり此頃
よりも専ら官醫の志ある方々ハ年々對話といふ
事を願て彼客屋へもき療術方藥の事を問ひ給ひ又
天文家の人も同く其家業の事を問ひ給へり當
時ハ其人々の門人なれハ同道し給へる事も自由
なり左あるより其方々の門人と唱へ出入りもあ

りとり長崎ハ御常法ありて猥り又旅館への出入
ハならぬ事なる又江戸ハ暫くの間事なれハ自
然と構もなき姿なりき其頃平賀源内といふ浪人
者あり此男業ハ本草家として生得て理よきよく敏
才小くよく時の人氣よくなりし生れなりき何
れの年なりし右といふカランズといへる加比
丹恭向の時なりし或る日彼客屋に人集り酒宴
ありし時源内も其坐に列りありし「カランズ」戲
よ一つの袋を出し此口試しよ明け給ふへしあけ
とる人よ恭らすへしといへり其口ハ智惠の輪よ

くとるものなり坐客次第は傳へさまく工夫すれ
 ども誰も聞き兼とり遂は末坐の源内は至れり源
 内はれを手に取り暫く考へ居りて乍ち口を開き
 出せり坐客はいふ及ハす「カラン」も其才の敏
 捷なるは感し直は其袋を源内は典へとりこれ
 りして甚と親しき厚くなり其後ハとひく客屋へ
 至り物産の事を尋問へり又ある日「カラン」一つ
 の棋子の如き形の「スランガステーン」といふ物を
 出し示せり源内はれを見て其功用を問ひ歸り翌
 日別は新は一箇の物を作り出して持ち行き「カラン」

「ス」見せとり「カラン」是を見て去れハ前日見
 せ示せし物と同品なりといへり源内曰く示さる
 る所の品ハ貴國の産物又ハ外國にて求め給へ
 るものなりと問ふと去れハ印度の地方別意セイロンと云
 ふ所にて求め來れりと答ふ源内又問て曰く其國
 にてハ如何なる所は産するものといへハ「カラン」
 「ス」曰く其國にて傳る所ハ此物大蛇頭中より出る
 石なりといへり源内聞てそれハ左様ハあるま
 し是ハ龍骨にて作りし物なるへといふ云ふ「カラン」
 「ス」聞ていふ天地の間は龍といふものハなき物な

り如何して其骨にて作るへいといへり是は於て
 源内已く故郷なる讃州小豆島より出せる大なる
 龍齒一つときとる龍骨を出し示して是即ち龍骨
 なり本草綱目といへる漢土の書に蛇ハ皮を換へ
 龍ハ骨を換ふと説けり今我示す所の「スランガス
 テーシ」ハ此龍骨にて作れる物なりといへり「カラ
 ンス」聞て大ひに驚き益其奇才に感しとる去れし
 よりて本草綱目を求め右の龍骨を源内より貰ひ
 得て帰れり其返礼として「ヨンス」トンス「禽獸譜」
 トニユース「生植本草」アンボイス「貝譜」といへる物

産家より益ある書物共を贈りたり是等の事も直對
 接話にて辨しとる事ありあらず附き添ふる内通
 詞部屋附などいへる者にて其情を通して辨せし
 去と小て一字一言通知せし去と小ハあらず其後
 源内彼地へ遊歴し蘭書蘭器なども求め來り且つ
 「エレキテル」といへる奇器を手小入れ歸府し其機
 用の事をも漸く工夫して遍く人を驚せり
 一此風右の如く成り行けども西洋の事を通しとる
 といふ人もなかりしと只何となく此事遠慮する
 去ともなきやうなるとり蘭書杯所持する去と

蘭書 十八
御免といふ事ハなけれども間々所持する人もあ
る風俗一移り來れり同藩の醫中川淳庵ハ本草を
厚く好ミ和蘭物産の學不も志ありて田村藍水同
西湖先生杯とも同志して毎春春向せる阿蘭陀通
詞共の方小も往來せり明和八年々のこの卯の春
ろと覺へたり彼客屋へ至りて「ア」ヘル「ア」ナトミ
「ア」カ「ス」パリ「ス」ア「ナ」ト「ミ」ア「ミ」いふ身躰内景圖説
の書二本を取り出し來り望人あらハ由つるへ
といふ者ありとして持帰り翁一見せたりもさより
一字もよむ事ハならされども臟腑骨節去れして

見聞する所ハ大ニ異にして去れ必ず實驗して
圖説してゐるものニ知り何となく甚と慾望と思へ
り且つ吾家も從來阿蘭陀流の外科ニ唱ふる身を
れハせめて書篋の中にもそなへ置ききものと思
へり然れども其頃ハ家甚と窶しくして去れを
求るよ力及ひつゝさりよより我藩の大夫岡新
左衛門といへる人のもさよ持行きつゝの次第
なれハ此蘭書求め度ニ告り然れども力の足ら
ざるハ是非なく語りつゝハ新左衛門聞きそれ
ハ求め置て用立つものゝ用立つものならハ價ハ

上より下へ置き様取計ふへき目當連ハ各けれも
 時翁それハ必ずふさ目當連ハ各けれも
 是非とも立つもの御目よ樹くへき
 答へり傍よ小倉小左衛門後青野改むといふ男居たり
 一ガそれハ何卒調へ遣さるへき杉田氏ハ去れを
 空くする人ハあらす助言一より依之い心
 易く願も望の如く調ひ得たり是れ翁の蘭書手よ
 入りし始めなり

一板毎々平賀源内をこし出會し時又語り合へば逐
 々見聞する所和蘭実測究理の事共ハ驚入りし事

たかりなり若し直に彼國書を和解し見るならハ
 格別の利益を得る事ハ必せりされども是より其
 所又志を發する人のなきハ口惜き事なり何とそ
 此道を開くの道ハあるまじきや連も江戸杯まで
 ハ及ぬ事なり長崎の通詞又託して讀み分けさせ
 度事なり一書よても其業成らハ大なる國益さも
 成るへきと只其及ひかよきを嘆息せしハ毎度の
 事なり然れども空しく去れを慨嘆するのよにて
 ありぬ

一然るに此節不思議は彼國解剖の書手入りし事

るれハ先其圖を实物ニ照シ見ときと思ひハ実
小此學開クヘきの時至りける又や此春其書の手
入リハ不思議とも妙とも云んハ抑頃ハ三月
三日の夜ニ覺ヘたり時の町奉行曲淵甲斐守殿の
家士得能万兵衛といふ男より手紙もて知らせ越
セハ明日手醫師何某といへる者千住骨ヶ原ニ
テ腑かいとせよふくあり御望あらハ彼方へ罷り
越れよふくと言文を去りて兼て同僚小杉玄適
といふハの其以前京師の山脇東洋先生の門ニ遊
び彼地ニ在リ時先生の企ニテ觀臟の事ありハ

此男ニ從ひ行て親しく視とるハ古人諸説皆空言
ふて信ハくとき事のミナリ上古ハ九臟と稱せり
今五臟六腑の目を令ちとるハ後人の杜撰なりな
んといへる事の話もありハ其時東洋先生臟志と
いふ著書をも出給ひたり翁其書をも見ハ上の事
をれハよき折あらハ翁も自ら觀臟してよと思ひ
居たりハ此時和蘭解剖の書も初て手ニ入リ事を
れハ照シ視て何れハ其实否を試むハ喜ハ一
ろとならぬ幸の時至れりハ彼地へ罷る心ニテ殊
ニ飛揚せり扱斯る幸を得ハ事を獨り見るべき事

ともあらず朋友の内にも家業も厚き同志の人々
 へハ知らせ遣ハ一同く視て業事の益も相互
 なるべきものと思ひ量りて先同僚中川淳菴を
 初某誰と知らせ遣ハせし中々も良澤へも知らせ
 越しより叔良澤ハ翁よりも齡十をりも長し我
 よりハ老輩の事にてありし故相識も去るあれ常
 くハ往來も稀に交接するなりしと醫事志篤
 きハ互ひふ知り合する中存れハ此一舉も漏すへ
 き人ともあらず先早く申通しとく思ひされとも
 さし拭りし事且つ此夜も蘭人滞留の折なれハ彼

客屋もありける由へ夜分もハなりぬ俄に知らず
 へき便りも存し如何せんぞ存せしグ臨時の思付
 して先手紙調へ知れる人の許し立寄り相謀りて
 本石町の木戸際居たりし迂駕の者をやとひ申
 遣せしハ明朝より々の事あり望あらハ早天も淺
 草三谷町出口の茶屋にて御越しあるへし翁も此
 処まで罷越し待合すへしと認め置捨てて帰れと
 持せ遣しけり

一其翌朝よく支度整ひ彼所に至りしは良澤赤り合
 其余の朋友も皆々恭會し出迎たり時し良澤一つ

の蘭書を懐中より出し披き示して曰く去れハ是
 「ターヘル・アナトミア」といふ和蘭解剖の書なり先
 年長崎へ行きとりし時求め得て帰り家藏せしも
 のなりといふ去れを見れハ即ち翁の此頃手に入
 りし蘭書と同書同版なり是れ誠ニ奇遇なりとて
 互ひし手をうちて感せり叔良澤長崎遊學の中彼
 地にて習得聞置しとて其書をひらき去れハ「ロン
 グ」として肺なり去れハ「バルト」として心なり「マーグ」と
 いふハ胃なり「ミルト」といふハ脾なりと指し教へ
 たり然れども漢説の図は似るへくもあらざれ

バ誰も直し見さる内ハ心中は「いっ」やと思ひし
 去りてありき

一去れより各打連立て骨ヶ原の設け置し観臓の場
 へ至れり叔腑分の事ハ穢多の虎松といへるもの
 此事は功者のよしとて兼て約し置しよし此日も
 其者刀を下さすへしと定めたるよその日其者
 俄に病氣のよしとて其祖父なりといふ老屠齡九
 十歳なりと云る者代りしして出たり健なる老者
 なりき彼奴ハ若きより腑分けハ度々手よりけ数
 人を解たりと語りぬ其日より前迄の腑分といへ

るハ穢多し任せ彼ら某所をさして肺をうと教へ
 去れハ腎をうと切り分け示せり夫を行き視し又
 之看過して歸り我々ハ直に内景を見究むるを
 いひくまての事にてありしとなり固より臟腑は
 其名の書記してあるものならねハ屠者の指し示
 すを視て落着せしむるにて其頃まてのならひを
 るししなり其日も彼老屠ら彼れの此れのを指し
 示し心肝膽胃の外は其名なきものをさして名ハ
 知らねとも已れ若きより教入を手よりけ解き分
 けし何れの腹内を見ても此処よりやうの物あ

りうくこは此物ありと示し見せしり図よりて
 考れハ後今明を得し動血脈の二幹又小腎をど
 よてありし老屠又曰只今まて臍今の度其腎
 師らとよ品をさし示しこれとも誰一人某ハ何
 此ハ何となりと疑れハ御方もなりしといへり
 良澤相俱し携ひ行し和蘭圖は照し合せ見し一
 さいていさく違ふ事なき品となり古來醫經は
 説する所の肺の六葉兩耳肝の左三葉右四葉など
 いへる分ちもなく腸胃の位置形状も大に古説と
 異なる官醫岡田養仙老藤本立泉老などハ其大なる

まで七八度も腑分給ひ由なれども皆千古の
 説と違ひ一毎度々々疑惑して不審開けす其
 度々異状と見しものを写し置れつらく思へハ
 華夷人物違ありやなと著述せられし書を見ざる
 事もありハ出れう為なるへし扱其日の解剖事
 終りとももの事又骨骸の形をも見るへしと刑場
 野さらしとなり骨共を拾ひとりてかぞく見
 し又舊説とハ相違しして只和蘭圖は差へる所を
 きし皆驚嘆せるのこなり

其日の刑屍ハ五十歳をうりの老婦まで大罪

を犯せし者のよし元京都生れまであど名を
 青菘婆と呼れしものこと

一 帰路ハ良澤淳庵と翁と三人同行なり途中まで語
 り合しハ扱今日の実験一驚入且去れまで心
 付ざるハ耻べき事なり荀も賢の業を以て互に主
 君々へ仕る身として其術の基本とすへき吾人
 の形骸の真形をも知らず今迄一日々々此業を
 勤め来りしハ面目もなき次第なり何とぞ此実験
 本つき大凡も身骸の真理を辨へて賢をなま
 此業を以て天地間を身を立てるの申訳もあるべ

一と共くは嘆息せり良澤もげは尤千萬同情の事
なりと感しぬ其時翁申せしハ何ぞぞ此「タ」フル
アナトミアの一部新しき翻譯セハ身軀内外の事
令明を得今日療治の上の大益あるへいりよも
して通詞等の手をくらす讀み分けよきものなり
と語りしは良澤曰く予ハ年来蘭書よき出度
宿願あれと去れよ志を同するの良友なり常々
去れを慨き思ふのこよて日を送れり各々よ弥去
れを欲し給ハハ我前の年長崎へもよき蘭語も少
くハ記憶し居れりそれを種として共くよこ掛る

へいよといひけるを聞それハ先づ喜ハしき去
なり同志よ力を戮せ給らハ憤然として志を立て
一精出し見中さんと答へたり良澤去れを聞き悦
喜斜ならず然らハ善ハいそげといへる俗説もあ
り直は明日私宅へ會し給へり如何やうよも工
夫あるへいと深く契約して其日ハ各々宿興々々
へ別れ帰りたり
一其翌日良澤々宅に集り前日の去を語り合ひ先
づ彼「タ」フル・アナトミアの書ようち向ひしは誠
に體舵なき船の大海に架出せし如く茫洋し

て寄へきなく只あきれはあきれて居る迄なり
 されども良澤ハ兼てより此事を心は掛け長崎迄
 もゆき蘭語並ひは章句語脈の間の事も少くハ聞
 覚へ聞ならひく人といひ齡も翁なとよりハ十年
 の長より老筆なれハ去れを盟主と定め先生と
 も仰く事となしぬ翁ハいまと二十五字さへ習ハ
 才不意と思ひ立し事なれハ漸くは文字を覚へ彼
 諸言をもならひく去となり
 一扱此書をよと始るは如何様とて筆を立へて
 談し合へては迎も始より内象の事ハ知れかたなる

へは此書の最初は仰伏全象の図あり去れハ表部
 外象の事なり其名起ハ皆知れとる事なれハ其図
 と説の符號を合せ考ふる去とハ取付きやするへ
 く図の初とハいひつとく先つ去れより筆を取り
 初むへて定めたり即解體新書形骸名目篇去れ
 たり其去るハ「テ」の「へ」の又「アルス・ウェルケ」等の助
 語の類も何れも何やら心は落付て辨へぬ事也へ
 少くつとハ記臆せし語ありても前後一向はマ
 らぬ事むらりなり譬へハ眉といふものハ目の上
 へ生しとる毛なりと有るやうなる一句紡縛と

て長き日の春の一日は明らめられず日暮る迄
 考へ詰め互はふらミ合て僅一二寸の文章一行も
 解く得る事ならぬ去こよて有りしなり又或る日
 鼻の尖よて「ブルヘツヘンド」せしものなりとあるは
 至りしは此語よりす是は如何なる事よてある
 へきと考合しといふ小もせんやうなく其頃「ウキ
 ルデインブック」釋辭といふものもなくようやう長崎
 より良澤求め帰りし簡略なる一小冊ありしを見
 合さるは「ブルヘツヘンド」の釋註は木の枝を断ちと
 る迹其迹「ブルヘツヘンド」をなく又庭を掃除すれは

其塵土聚り「ブルヘツヘンド」すといふ様よよミ出せ
 り去れは如何なる意味なるへし又例の去こく
 去つつけ考ひ合ふは辨へ兼とり時は翁思ふは木
 の枝を断りし跡愈れは堆くなり又掃除して塵
 土あつまれは去れもろづとろくなるなり鼻ハ面
 中よ在りて堆起せるものなれは「ブルヘツヘンド」
 ハ堆ウツルカシといふ去こなるべし然れは此語ハ堆と譯し
 てハ如何といひけれは各去れを閱て甚と尤なり
 堆と譯さハ正當すへしと決定せり其時のうれし
 きハ何よととへんろともなく連城の玉をも得し

心地せり如此事にて推て訳語を定めり其数も次
 第々々増く事となり良澤のすては覺居
 譯語書首をも増補くけるなり其中にも
 なといへる事出く至てハ一向に思慮の及ひ
 とき事も多うりく去れらハ亦往くハ可解時も出
 來ぬへく先つ符號を付置へくして丸の内は十文
 字を引きて記く置たり其頃不知去をハ書十文
 字と名けたり毎會いろくは申合せ考へ案くても
 解すへうらさる事あれハ其苦さの餘りそれも又
 くつ二十文字く申たりき然れども為すへき事

ハ固より入は在り成るへきハ天はありの喻の如
 くなるへく如此思ひを勞く精を研り辛苦せく
 去て一ヶ月は六七會なり其定日ハ怠りなくはけ
 もなくして各相集り會議して讀合ひくは實は不
 昧者ハ心とやらはて凡一年餘過ぬれハ譯語も漸
 く増く讀く随ひ自然に彼國の事態も了解する様
 として後々ハ其章句の疎きハ一日は十行も其餘
 も格別の苦勞なく解く得るやうにもなりたり尤
 毎春春向の通詞どもへも閑熟せし事もあり又其
 間ハ解屍の事もあり亦獸畜を解きて見合せし

蘭學事始

事も度々のまじなりき

二十九

三十一

蘭學事始上卷終

